

第5回蕎麦蘊蓄の旅

「幌加内新そば祭り」を訪ねて

蕎麦蘊蓄の旅は今年、分桜流創立5周年記念の一環として、平成12年9月1日～3日の3日間、幌加内町の「新そば祭り」をメインに北海道を訪ねた。

家族、友人を交えた会員一行16名の旅模様を報告します。

旅程1日目：9月1日（金）

旅立ちには羽田空港から



フルムーン組みを含む分桜流一行は、羽田空港に勢揃いし、午前10時発のANAで北海道千歳空港へ飛立つ。

1時間ほどで千歳空港に着き、出迎いの貸し切りバス（3日間）で札幌市内の手打ちそば処「志乃家」に向う。北海道でのそば喰い初めは昼餉となった。

「志乃家」は札幌中心街にある一茶庵系「蕎麦屋」。店主の新納 忠さんは戦後生まれ、札幌で普通の蕎麦屋から本格的な手打ち蕎麦屋に転向して10年余だという。

いまのところ、店構えの風情、味ともに並みの一茶庵系といったところか。

御用達「山加製粉」の工場見学へ

「志乃家」で分桜流御用達の「蕎麦粉屋」山加製粉の帆足泰幸専務が一行を迎えてくれた。早速本社工場（札幌市内）石狩工場見学へ帆足専務とともに向う。

「山加」が誇るのは、石狩工場だった。国産蕎麦専用の同工場は、契約栽培の北海道産玄蕎麦を殻取りの「丸抜き」から石臼製粉機での挽き、各種の篩機での篩作業まで、全て同社独自技術で自動化されており、工場職員数人で24時間稼働し、日産5トンの蕎麦粉が生産されている。

特に、石臼製粉室には、今年度から冷房設備を導入し、暑さに弱い蕎麦粉の劣化を抑えているという。なるほど、真夏でも比較的劣化の少ない上質の蕎麦粉が供給されるわけである。分桜流御用達の面目躍如のこだわりです。「篩機だけでも1千万円以上かかるんですよ」と帆足専務がポツリ。

分桜流一行は同工場内で記念写真を撮り、別れを告げて札幌に戻った。



帆足専務の説明を真剣に聞く



山加製粉石狩工場にて

札幌の夜は生憎の空模様

夕方、札幌のホテルにチェックイン。台風崩れの低気圧が日本海沿岸から接近しており、札幌の夜空は荒れ模様になってきた。

一行は夫々ツイン部屋で一休みした後、サッポロビール園で名物「ジンギスカン料理」の晚餐。そこへ、仕事の都合で遅れてきた大番頭の阿部氏が夫人とともに参加となり、「一安心」の気分が一同を包んだ。

サッポロビール園は店の雰囲気も味も超大型ファミリーレストランに飛び込んだ感じであった。

一行は、ビール園を後に、地元出身の野島氏の案内で特別に美味しい「サッポロラーメン」を食べホテルに戻る。フルムーン組みも男同士組も「分桜流には晴男がいるぞ」と明日の好天を夢見つつベットインした。



ジンギスカンとビールはよく合います。
「あ！それ私の肉」

旅程 2 日目：9 月 2 日（土）

荒れる風雨の中、新そば祭りで交流深める

午前 8 時、分桜流一行はホテル前から、日本一のそばの里・幌加内町の「第 7 回新そば祭り」会場に向けてバスで出発。気になる天気は、バスが北上するにつれて風雨が激しくなってきた。

最悪のときは、深川市を過ぎ、幌加内峠を越えたところで起きた。雨竜川支流が決壊、道路の冠水で車が 1 台立ち往生している。風雨の中バスの運転手とガイドが迂回路を探し始めていると、地元の車が冠水道路を渡り抜けて行った。「あの車より車体が高いバスは大丈夫だろう。」と運転手が強行突破を図り、一難は去った。

間もなく幌加内町役場周辺の「新そば祭り」会場に到着できた。

雨と風で傘が役に立たない中で、祭り会場には地元や福井、福島、茨城県などのそば研究会や愛好会の面々が、幾張りものテント内で自慢の「そば食べ歩き広場」を催している。

一方、町民研修センターでは「新そば献上祭」や「北海道そば打ち名人大会」などが催しされていたが、生憎の天気で人出はいまひとつだった。

早速、雨の中のテントを訪問すると、分桜流ではおなじみの紋別「光工房」鈴木氏（分桜流 HP 交友抄参照）がそば道具店を出しており、そこには、懐かしい山本幸子さん（山本名人の夫人で木工芸術家：分桜流 HP 交流ひろば参照）娘さんの夏姫ちゃんが店番をしていました。そして、北海道そば研究会の拠点となっている公民館で、山本 稔名人（平成平成 10 年全国素人そば打ち名人福島大会 名人位：分桜流 HP 交友抄参照）と再会し、旧交を温める。山本名人は、祭りで出すそばを打っており、見学させていただいた

が、名人の技に一同荒天も忘れて見入っていた。

一方、鈴木氏は、祭りのイベントでもある「北海道素人そば打ち名人大会」に出場するので大忙しである。(結局、鈴木氏はこの大会でめでたく「北海道名人」に輝いたとのこと。おめでとうございます。)

分桜流一行は、思い思いにテントの蕎麦屋(道内10店、道外4店が出店)で昼食のそばを食べ歩いたり、茨城からそば打ち道具とともにフェリーを利用して幌加内に入ったという益子正巳名人(第3回全日本素人そば打ち名人大会 in 福井にて名人位: 分桜流HP交友抄参照)「北の蕎麦屋さん」の著書でお馴染みの蕎麦研究家の渡辺克己氏ら顔なじみの人々と旧交を温めたり、雨中での交流を深めた。



この日の幌加内地方は、地元の人にもビックリの荒天。道路の交通止めの情報もあり、分桜流一行は、宿泊地旭川に夕方まで帰れるか心配になってきた。

しかし、空路はるばるの思いから、「日本一広いそば畑を一目みたい。」と、バスを風雨で荒れる畑へと向けた。

そば畑は、天塩山脈南端の三頭山(1005m)山麓に広がっており、天気がよければその広大さに驚嘆したであろうが、折からの風雨で川岸の畑は氾濫した水に浸かっているなど惨憺たる様子であった。

そんなそば畑の真中に「せいわ温泉ルオント」(成和町民保養センター)があった。雨に濡れ、初秋の冷気を肌感じていた一行は、急遽温泉入浴と相成った。

白樺林に囲まれた男女別の露天風呂で手足を伸ばせば「ああ、そばの里幌加内よ」と荒れる天候をしばし忘れさせてくれた貴重な時間であった。

分桜流一行は、一旦そば祭り会場に戻り、山本名人一家や光工房の鈴木氏らと別れを惜しみながら、風雨の中を今晚の宿泊地である旭川へ向かった。途中、川の氾濫により一面湖のようなそば畑を見ながら、夕方5時ころには旭川市街

地にある「クレッセント旭川」ホテルに着いた。



広大なそば畑は、風雨で霞んでいた。

温泉の露天風呂で冷えた身体を温める。

旭川の夜は「八角の味」

北海道第2の都市旭川市（人口36万人）は、日本初の歩行者天国が生まれた街。

その平和通り脇に「三六街」と呼ばれる繁華街がある。その一角の居酒屋「大舟」で旬の地元魚「八角」を食べた。

八角形をしたオニオコゼ風の強持ての姿に似合わず身は白身で美味であった。ホテルの紹介でここに来た分桜流一行は、今日の荒天を吹き飛ばすがごとく、山海の珍味の味と地酒で大満足。「浮気の発覚（八角）の恐れ無し」などの駄洒落も飛び出す上機嫌な酒宴を過ごした。



八角の珍味に旭川の夜は盛り上がる。

旅程3日目：9月3日（日）

北海道ど真ん中で初秋を満喫

朝、目覚めるとホテルの窓に太陽が顔を出していた。昨日までの荒天が嘘のようだ。バスは旭川から大雪国道（39号線）を東南に走り、1時間ほどで国立公園「層雲峡」の入り口に着いた。

ここから石狩川沿いに約24キロ、柱状節理（火成岩の横断面が様々な模様の割れ目）の断崖絶壁が続く層雲峡渓谷となる。絶壁には「鬼岩」、「マリア岩」、「大羅漢」、「こうもり岩」、「地獄岩」など45以上の名前が付けられている。

白眉は不動岩を挟んで流れ落ちる「銀河の滝」と「流星の滝」の景観だ。左側の銀河の滝は、120mの高さから銀糸のように流れ落ちる様子を「女滝」と呼び、右側の「流星の滝」は90mの高さから流れ星のように1本の線状に流れ落ちる様子を「男滝」と呼び、「夫婦滝」の別名を持つ。

大渓谷は四季折々の景観に彩られ、紅葉シーズンが最も観光客を魅了することのだが、分桜流一行が訪れたこの時期、紅葉には一足早いようであった。



層雲峡にて

びえいの丘の大展望に感嘆！

大峡谷「層雲峡」に別れを告げ、大パノラマの美瑛の丘へ向かう。途中、大雪国道沿いの「北の森ガーデン」（上川町）のレストハウスで昼食。食後、アイスパビリオン（氷点下45度が体験できる）や熊牧場見物を楽しみ、美瑛町へ。

美瑛は、十勝連峰に抱かれた大地にジャガイモ畑やビート畑、お花畑がパッチワークのように広がる丘の町。

分桜流一行は「パッチワークの路」(ケンとメリーの木・・・セブンスターの木・・・北西の丘展望公園・・・マイルドセブンの丘)と名づけられたコースを一周した。

J TのCMや写真集で知られる景観はお目にかかれたが、名物ラベンダー畑はもう季節外れであった。

しかし、展望台から夏の名残をとどめる雄大な眺めには「これぞ、北の大地」と感嘆の声が出た。



びえいの丘にて

さらば、北海道の大地よ！

びえいの丘から旭川空港までは、バスで20分余り。分桜流一行は空港で、土産の買い物やティータイムなどで過ごした後、16時5分発のANAで羽田への帰路についた。

ともあれ、分桜流5周年記念として、日本一の蕎麦生産地「幌加内新そば祭り」をメインとした北海道の旅は、分桜流を支えてくれる家族、友人たちとの親睦・交流を一段と深めることとなった。

なお、今回の旅をお世話いただいた桜流そば打ち研究会会員でもあるパシフィックツアーシステム社長の高崎満さん、台風並みの荒天の中、安全に楽しく一行を運んでいただいたバスの運転手さんとガイドさんにお礼を申し上げ、報告とさせていただきます。

(文：安西露之介 構成：阿部成水)